

研究テーマ

低活動でも胼胝が形成されるか
～外来維持透析患者の横断的パイロット検討～

病院名

医療法人社団健育会 西伊豆健育会病院

演者

かとうこういち
○加藤耕一(理学療法士)

概要

【研究背景】

胼胝とは、皮膚が繰り返し外部刺激を受けることで角質層が肥厚・隆起した状態を指す。胼胝は潰瘍を経て下肢切断に至る場合があり、透析患者は下肢切断に陥る割合が高い1)。下肢切断後の1年生存率は約50%と報告されており2)、胼胝形成の予防は生命予後のみならず、住み慣れた地域での生活継続の観点からも重要である。

【研究目的】

胼胝の発生要因に関する報告は散見されるが、外来維持透析患者における活動量との関連は明らかにされていない。本研究は、当院透析センター通院患者を対象に、胼胝形成に関連する要因を明らかにすることを目的とした。

【研究方法】

当院倫理委員会の承認を得て、当院透析センター通院中で研究に同意が得られた33名(66脚)を対象とした。胼胝の有無で2群に分類し、足関節背屈角度、Life-Space Assessment(以下LSA)、ヘモグロビン値(以下Hb)をMann-Whitney U検定、糖尿病(以下DM)の有無および介護保険の有無を χ^2 検定にて分析した。統計解析にはFreeJSTATを使用した。

【結果】

足関節背屈角度は、胼胝の有無($p<0.001$)およびDMの有無($p=0.01$)で有意差を認めた。また、胼胝の有無と介護保険の有無の間にも有意差を認めた($p=0.04$)。一方、LSAおよびHbでは有意差を認めなかった。

【考察】

足関節背屈角度の中央値は胼胝有り群で5度、無し群で15度であり、背屈角度5度以下が胼胝形成に関与する可能性が示唆された。

さらに、DM罹患例では足関節可動域の低下が認められ、介護保険を有する患者で胼胝形成が多かったことから、身体的フレイルの関与が考えられた。一方、LSAに有意差を認めなかったことから、活動量の多寡にかかわらず胼胝が形成される可能性が示唆された。以上より、胼胝形成には活動量よりも足関節可動域制限が強く関与し、加えてフレイルとの関連が示唆された。

【結論】

外来維持透析患者に対する理学療法介入では、足関節背屈可動域の改善およびフレイル対策に着目することが、胼胝形成予防に有用である可能性が示唆された。

【引用参考文献】

- 1). 上村哲司:糖尿病足病変に対する下肢切断術. 創傷, 3(4):196-200, 2012.
- 2). 松村陽介:下肢切断術後の予後調査. 整形外科と災害外科, 58(3):460-463, 2009.